空と風とあなたと・・・

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空と風とあなたと・・・

【Ｎコード】
Ｎ１４０４Ｇ

【作者名】
星河　翼

【あらすじ】
オリジナルＢＬ（軽いです）小説です。苦手な方はご遠慮ください。三枝葵は、小学生時代にであった少年の事を覚えていた。「雲は、何故あんな風に形を変えながら流れていくんだろうね？」初めて言葉を発したその声は、イメージ通りの透き通った声で心地良く感じられた。「何故ってそれは上空に風が吹いているからだよ」少年は、当然の事を口に出していた。「風……」「そうさ、風が吹いているんだから、いつまでも同じ形を保っている訳ないでしょ」そして高校生になり、出逢った相手は？その子なの？

#1　出逢い（前書き）

危ない表現は無いです。
短いお話ですが、ＢＬがお好きな方はどぞ。

#1　出逢い

七色に染まりつつある空の色が、滲んでいる。それはまるで、この秋空に彩りを添えているかのようである。
「お～い、彼方～夕飯だぞ！」
弱い西日を浴びて、一人の少年が土手をキョロキョロしながら歩いている。
「彼方のやつ、何処まで遊びに行ったのかな……ん？」
視線の先に土手の草むらに横になっている人影を見付け、その少年は駆け出した。
きっと少年は、その人影を先程から捜していたのであろう、彼方という少年だと信じてズンズンと近づいて行った。
「彼方？…ってあれ？」
その姿を見下ろすかのようにして声掛けたまでは良かった。しかし、そこにいた人影は全くの別人であったために、彼の者の声は消え失せてしまったのである。
そう、空を見上げて寝転がっているその姿、形はまるっきり違っていた。
真っ黒な艶のある髪は、オレンジ色の光を浴びて淡く燈めいている。そして、腰まであるだろうと思われる長い髪、無造作に寝転がっているため草の上に四方に散らばっていた。
それより何より、真っ白い透き通るような肌に浮かび上がっている黒目がちな瞳が、何か遠い目をしている事に気付き、その少年は目を奪われた。
「あ……すみません……人違いでした」
一瞬見とれてしまった事の恥ずかしさから、言葉がぎこちなくて赤面しそうになる。
しかし、こんな所で一体何をしているのであろうか？ふと疑問が生まれてしまうのを少年は気付いてしまった。

自分とさほど年が違わないであろうこの者。視線は未だもって、空を静かに見上げている。今、一陣の風が吹き抜けていった。ブルゾン姿の少年の服がシャリシャリと膏をたてる。
「あの？此処で一体何をしているの？」
少年は、興味をそそられて問いかけてみた。しかし返事は返ってこない。
代わりに、今まで静かに横になっていたその者の右腕が、静かに弧を描いて空を指差したのである。
「空？」
少年はその指が指し示す空を見上げた。
何も変わり無い空は、悠然とそこにあるだけで何も自分に教えてはくれそうにも無く、再び目線を戻した。
「空がどうかしたの？」
不思議に思いもう一度問いかける。再び風が二人の間を流れて行く。
「雲は、何故あんな風に形を変えながら流れていくんだろうね？」
初めて言葉を発したその声は、イメージ通りの透き通った声で心地良く感じられた。
「何故って、それは上空に風が吹いているからだよ」
少年は、当然の事を口に出していた。
「風……」
「そうさ、風が吹いているんだから、いつまでも同じ形を保っている訳ないでしょ」
少年は、続ける。
「まるで初めて空を見るかのような事を言うんだね？何処から来たの？オレは、三枝葵。この土手の下に家があるんだ」
視線を家がある方へと向ける。すると弟の、彼方を捜していた事を思い出してハッとした。
「ごめん。急いでるんだった。君はまた此処に来る？」
葵は、何だかまたこの者に会いたいと思ったために、すかさず問

いかける。
「風になりたい」
「え？」
ボソリと呟かれた言葉が聴き取りづらくて、葵は聞き返した。
「ありがとう。葵君」
会話が通じていないのかも知れない。お礼を言ったその者は、静かに立ち上がった。
葵の背丈よりも高いその者は、フワッと、まるで春風のような穏やかな風を伴っているかのように、黒い髪を揺らしながら葵の横を通り過ぎた。
その様子を、ただ呆然と見送る。まるで、この世のものでは無い者でも見ているかのような感覚を覚えていた。
「お兄ちゃん！」
突然の背後からの声に、見送っている者にだけ気を取られて、彼方の声に一瞬気付かなかった。それ程、今立ち去って行く看の事に思いが集中してしまっていたらしい。背中を叩かれて初めてその存在に気が付いたのである。
「また、会えるかな……」
後ろ姿のその者を見送りながら願った。しかし、その後、彼の者がこの場所に来る事は無かったのであった。

今日は、転校一日目。
夏も終わりを告げようとしている。秋の始まりの二学期。
親の勝手な転勤の為に、葵はここ、静岡の二子高校に転入する事になったのである。その上、男子のみの全寮制。昨日、一通りの手続きを済ませて、荷物も運び終わり、葵は一段落を終えていた。
「葵も社会勉強と思って、寮生活でもしてみれば？」
なんて、勝手な母親の言い種にも参ったものだ。
今まで悪友と楽しんで来た、東京の華やかな高校生活。それが、一晩にしてこんな山しか無い田舎の学校（しかも全寮制）に押し込

められるなんて、どう、のたうちまわっても自分には合わないだろうなと思うと、　お先真っ暗な気がしてならなかった。
　そんなことを考えながら、朝食は寮の食堂で終わらせて、そそくさと今後の準備に取りかかる葵。
　始業式は、体育館で行われる事になっているのだが、その前に、職員室に顔を出さなければならなかった。
　しかしこの学校は、広い！の一言に尽きる。小学校、中学校、高校とエスカレーター式の学校ともなればこんな広い敷地になるのかも知れないが。それにしても、何処を見渡しても、木々が立ち並んでいて葵の目には、森か林かと思い違いしてしまう程にであった。
「だあ一一一！何処なんだよ！ここは！」
　そんな事を叫びながら、葵は寮を出て、駆けずり回りながら、敷地内を彷徨っていた。
　ふと、脇の木立から声が聞こえて来たために、誰かがこの辺りにいると察し、道を聞こうと足早に駆け寄った。
「すみません」
　木立の影から聞こえていた声が、葵の声で遮られる。
「今日からこの学校に転入して来た者ですが……」
　一瞬目を疑った。
「何だよ……今良いとこなんだから邪魔すんなよな……このチビ！」
　突然襲いかからんばかりに、目の前に歩み寄って来た大柄の男は、葵の胸ぐらに手を掛けんとしている。
「え？あ…道が分からないので、教えてもらいたいのですが……」
　一瞬躊躇ったものの、どうにも分が悪いと察して後ずさる。
「道だ？んなもん、この先の掲示板でも見るんだな！分かったらさっさと行きな」
　まるでこの場からさっさと去ってくれとばかりだ。
「そうですか。どうもありがとうございました…失礼します」
　葵は言われたた通り、この場からさっさと離れた方が無離だと、シャツのネクタイを直して後ろを振り返った。

「じゃ！オレもこの子と一縮に行くよ！」
突然後ろから腕を掴んで来る者がいた。
「え？」
突然掴まれた腕を引っ張るかのように、駆け出すよう促されたのである。
「おい！瑞樹！待て！」
そして、後ろから追い掛けて来る大柄な男。
葵は何がなんだか分からずに、この瑞樹と呼ばれる者に先導されて走らなければならなくなったのである。転較早々の一大事、そんな予感であった。

「此処まで来れば、もう平気だろう」
ド派手な金髪のその青年は、校舎の一角の水飲み場で、顔を洗い終えて薄っぺらい鞄からタオルを取り出しながらそう言い放った。
葵はというと、その近くの階段に座り、ハァハァ息を整えている。
見かけは華奢な感じだが、一体どうして。その走りっぷりは葵の数段上を行く。
「いやあ、助かったよ。君が来てくれて」
そう言いながら、瑞樹と言う青年は、葵の隣に腰を下ろす。
「オレ、三年D組柳瀬瑞樹。君は？」
にっこりと、微笑んでいるその端正な顔に吊られるかのように、今あった物が全て飛んで行った気分になる。
「三枝葵。一年D組のハズなんですけど。確か……」
「ああ、転入生だったよね。さっき道聞いてたから。ごめんごめん。いきなリ、こんな事に巻き込んじまって」
顔を洗ったわりには、頭から水を被ったかのように、濡れたその髪の毛を掻き揚げながら、瑞樹は人懐っこそうに微笑んでいる。
「どうかしたんですか？あの追っかけてた人。ただ事じゃ無いような勢いでしたけど？」
先輩と分かったからには、敬語なる物を使わないと。只でさえ全

寮制なんだし。恐い人には見えないけど念のため。葵なりに、したたかな先輩後輩のあり方は心得ている。
「ああ。忍の事？良いの良いの放っとけば。全く五月蝿くてたまんないんだよな。いつまでも保護者みたいに付きまとうんだから」
「はあ……」
困ったもんだとでも言うかのように、瑞樹は頬に手をのせる仕種をする。その瞬間、耳のピアスが目に入った。いや、それよりなりより、首筋にキスマークらしき物がしっかりと刻み込まれている。葵はドキリとした。
「あの？職員室何処なんでしょうか？そろそろ行かないと……」
何だか、関わってはいけない人の側にいる気がして来たために、そそくさと立ち上がろうと腰を浮かせる。
「そっか。職員室は、その校舎の一階にある。さて、オレはこれからさぼり。君は始業式楽しんで来いよ」
指差されたその校舎の入り口がここからも伺う事ができる。ホッと息を付く事が出来て葵は生きた心地がしていた。
「ありがとうございました。では失礼します」
「また会おうな」
ブンブン手を振りながら微笑んでいる瑞謝を尻目に、葵は急いで駆け出した。
あと五分で始業式は始まる時間であった。

#2　陸上部入部

「三枝！部活はもう決めたか？」
クラスメートとも慣れ親しんで来たこの頃。この学校の方針である、全生徒部活動に入る規則。がやたら耳に入って来る。
「決めてるんだけど、まだ、届け出してないんだよ」
葵の下敷きの間に挟み込まれている、一枚の入部届けの紙。
「どれどれ？」
始業式以来、出席番号も近いし席も近いため、このクラスで一番仲の良くなった、清水洋之はその紙を覗き込んだ。
「陸上部〜？」
意外そうに語尾を伸ばしながら、葵の顔と見比べていた。
「んだよ？」
「文化部かと思ったんだけどな」
「オレがか？そんな柄じゃないよ。前の学校でも陸上部だったんだ。やっぱ、気心の知れている部活が良いかと思ってね」
下敷きをトントンと鳴らしながら答える。
「で、どう？この学校の陸上部は？」
その問いに、
「うちの陸上部は、何てったって、マネージャーが最高だぜ！」
「は？」
「部活自体は、結構ハードにやってるみたいだけど、マネージャーのあの笑顔のためなら、どんな苦難でも乗り越えてみせるとみんな必死にやってるよ。オレも、間近で見た時は、感激したよなあ」
そこで遠い目をしてみせる清水の顔は全く間が抜けていた。
「あのな。マネージャーったって、男だろ？んなもん、嬉しくも何ともないじゃないか！」
肘ヅエを付いて、呆れ顔で清水を見た。
「外から来た者には解らないかも知れないけど、小学校からこの学

校にいるオレ達にしてみれば、嬉しいもんなんだよこれが！」
　所詮、他所者？何だか府に落ちない気もしたが、話を合わせてみる。
「へえ？で？」
「この学校の理事長の子供なんだけど、小学校の時に１００メートルで高校生レベルの記録を出したんだよ、でも心臓が悪いらしくって、その記録一回だけを残し、今じゃマネージャーとして陸上部に所属。まさに、伝説の風のランナーと言われているよ」
　伝説の風のランナー？
「でも、あの人には、都筑さんって言うれっきとした彼氏がいるから、誰も言い寄ったりはしないんだけどね。うん。お似合いだし」
　これには参った。彼氏って一体？
「せいぜい頑張れよ。毎年マネージャー目当てに入る奴ら多いらしいけど、練習はきついらしいから！」
　一方的にそんな事言われても、さっぱり解らない。
「へえ…で、そのマネージャーってなんて人なの？」
　別段気にする事もなかったのだが、葵は問いかけてみた。
「柳瀬瑞樹、三年生だよ」
「柳瀬瑞樹？」
　どこかで聞いた事のあるような。ふと頭を過ぎる、その名前に心当たりがあるのだが思い出せない。
「確か、弟かいるんだよな…憐のクラスに……兄貴とは違って物静かな奴だけど、違う魅力があるからって密かに人気があるぜ。そうそう、陸上部員のはずだから、お近づきのしるしに、いっそその入部届け渡したら？まだ休み時間あるし丁度良いんでない？」
　一体どう言う学校なんだ？葵の反応はいたって拒否を示しているのに、清水は葵の腕を引っ張って、隣のクラスへと引き連れて行ったのである。
「ほらあそこ！」

そう言いながら、後ろの開いたドアから一人の青年を指す。
「あの、窓際の机に一人で座ってる！」
遠目で見る限りでは良く解らないが、黒髪を後ろに一つに束ねた青年が一人席についている。
こんな休み時間に独り黙々と読書に勤しんでいる辺り、真面目な奴なんだろうなと解る。
「ちょっと悪いんだけど、柳瀬瀬君呼んでくれないか？」
行動に移すのが早いのか、清水は近くにいる青年に声を掛けている。
一瞬、ざわめきが起きる、何なんだこのざわめきは？それに一斉に視線が自分に注がれている事に気付き、葵は身じろぐしかできなかった。
「はい。柳瀬だけど？」
こちらに向かって来るその姿を見て、葵は驚きの余り、目を見開いた。
まさかこんな所で、再会するなんて…
あの時の記憶はまだ残っていた。
どんなに色褪せようとあの白い肌に、黒目がちの瞳。まさしく彼の者であった。
遠くを望むその瞳の先に一体何を見ていたのだろうか？あの時の感覚が今でも一つ一つ思い出す事ができる。
そんな固まっている葵の様子に清水は気付く事もなく、
「陸上部に入部希望の奴がいたから連れて来たんだ。ほれ、三枝！」
肘で突く清水に気付いて葵は手に持っていた入部届けを手渡そうとした時、
「入部？ふ一ん。君も、瑞樹目当てなの？」
とんでもない言葉が耳に飛び込んで来た。
「え？」
度胆を抜かれた葵は、慌てて何かを話そうとするのだが、言葉が出てこない。代わりに、

「ああ、こいつ。前の学校で陸上部だったんだって。全員部活制だから、陸上部に決めたんだってよ」
「そう……何やってたの？」
まだ、疑いの目は有るものの、さっきまでの感情を押し殺した言い方は薄らいだ。
「オレ、ハイジャンプをやってたんだ。背はハイジャンプやるには低い方だけど、そこそこ飛べる方だとは思うよ」
アピールする必要性が有るだろうと、ちょっと付け足してみた。
「分かったよ。それじゃ放課後、ボクのクラスに来てくれるかな？一緒に部室を案内してあげるよ」
幽かだが、一隅微笑んだのが葵の目に焼き付いた。笑った？そう思うと、胸がズキンと締め付けられるような妙な気持ちに陥る。
そこで、休み時間の終了のベルが鳴り、二人は自分のクラスに戻ることとなった。

その後の授業は、葵の落ち着かない意識の中で足早に時間を刻んで行ったのである。
「あの……名前、何て言うの？」
放課後、賑やかな部活動が始まる中、葵と柳瀬は渡り廊下を歩いていた。
「柳瀬聖樹」
物静かなのか、自分から話し掛ける事をしないのか、沈黙したまま黙々と歩いているのが耐え切れず、その間をうめる為に、葵は問いかけたのである。
「オレ、三枝葵。柳瀬君は、陸上で何の種目をやっているの？」
ちらりと横を伺ってみる。
「聖樹でいいよ。瑞樹と間違われるの嫌だから……１００メートルだよ」
簡潔な答えで、味気ないなとは思ったものの、一つ引っ掛かる事があった。でもこの時はそのまま受け流してしまった。

「じゃあ、オレの事も葵と呼んでもらったほうが良いんだけど？名宇って何だか嘘寒いんだよね」
その言葉に、少し考えているようでは有ったが、
「分かった」
一言言うと、そのまま部室まで一言も交わさずに黙々と歩いたのである。

部室は、使われなくなった校舎を部室用に改築したシンプルなつくりの教室であった。
「今日から新しく入った、三枝葵君だよ」
部室に通されると、周りの部員に聞こえるかのように、軽く聖樹のロから紹介を得た。
「あっ、忍！これ、入部届けね」
手前に有るロッカーの裏に足を運んだ聖樹は、ポケットに入れていた入部届けを、その忍という部員に手渡した。
「！？」
その瞬間、葵は頭を殴られた気分に陥った。
「葵、この人が部長の都筑忍さんだよ」
葵より頭一つ半大きい体格のその者は、思い出したくもない、始業式に胸ぐらを掴まれそうになったあの男ではないか。
「君は……」
一瞬、大きく目を見開いて驚いた様子の忍は近くに有る椅子にドカッと腰を下ろした。
「あの時は、失礼致しました」
深々と頭を下げる葵。
「いやいや、取込み中だったから、気にしなくて良いよ。こちらも悪かったな」
片足を組み、その上に肘を付きながら、不適に笑うその姿が無気味で、ちょっと苦笑いしてしまった。
「何？知り合い？」

聖樹は葵と忍を見比べながら問う。
「まあ、ちょっとしたな。で、種目は？」
本題に入ろうとする忍。
「ハイジャンプです」
「おっと、参ったな。ライバル登場か？」
ニヤニヤ笑いながら忍は葵を見上げる。
「え？」
解らずに素頓狂な声をあげる葵に、
「忍もハイジャンプなんだよ。これからは共に競い合わないといけないね」
競い合うったって、この体格の違いを見れば一目瞭然ではないかと周りの者達は密かに笑っていた。しかし、
「部長！お互いに頑張りましょう！」
葵は正直負けず嫌いであった。その言葉に、楽しいやつだなと言わんばかりで、
「楽しみにしてるぜ！ルーキー」
立ち上がりながら、忍は葵の肩に手を乗せて一発ポンと叩く。
「さて、時間も少なくならない内に、着替えた者はさっさと校庭に出て準備しろ！」
部長らしい威厳の有る態度で、一、二年生達を急がせる。
「今日は、見学して行くと良い。あ……そう言えば、瑞樹のやつまだ来てないのか？あいつ…」
その時ハッとした。
柳瀬瑞樹の名前が誰を意味するのか。この時思い出したのである。あの時の、ド派手な金髪が目の前を通り過ぎたからであった。
「あっこら！瑞樹！何をしてたんだ！授業はとっくに終わっているだろう。終わったらさっさと部室に来い！」
瑞樹に駆け寄ると忍は直ぐさま説教を垂れはじめる。
「ごめんごめん。寝過ごしちゃった」
愛想笑いなのか何なのか？瑞樹はニコニコと笑っている。

「笑うな！ったく……あ、新入部員が入ったんだ。名簿作り替えておいてくれよな」
「新入部員？…君はあの時の！また会えたね！」
駆け寄って、葵の手を握ると上下にブンブン振る。そんな葵は、やっぱり…と言う表情でげんなりしていた。
「瑞樹の知り合いなの？」
面白く無さげに、聖樹は横で見ている。
「助けてもらったんだよ。なっ！」
惜し気も無く元気に笑っているこの瑞樹の表情を見ていると、勢いに乗せられると言うか、
「そうなんですかね？」
葵は肯定するしか無かった。その様子に一瞬細い目をした聖樹は、
「早いとこ着替えないと」
スッと後ろを振り向き、裏のロッカーへと消えて行った。
「さて、オレも行くかな。瑞樹、三枝のロッカーあてがっておけよ！まだ開いてるロッカー有ると思うから」
言い残すとさっさと部室を後にする忍であった。
「ほ一い。さてと、聖樹！ロッカーだけど確か、聖樹の隣が空いてたよな？」
すかさず裏に回る瑞樹。そしてその後を着いて行く葵。
「空いてるよ」
葵は思わず、着替え中の聖樹を見て、目を逸らせてしまった。
「んじゃ、ここ使ってくれるかな？一年生同士だし、気が合うだろう？」
葵の方を見て気を利かせたかのような素振りの瑞樹だったので、
「そうですね。そうさせて頂きま……」
「瑞樹の隣の方が良いんじゃ無い？お知り合いなんだし！」
突如遮るかのように、言い放つ聖樹。何でこんな態度を取るのか解らない葵は絶句した。
「聖樹？オレのロッカールームの隣は詰まってるの。いちいちお前

の言い分通してロッカー替えなんて出来ないだろ？」
「……」
いきなり黙り込む聖樹を無視したかのように、
「さてと、じゃあここは葵君、キミが使ってね」
「あ…はい」
まるで、兄弟の権力争いのような感じが一気に吹き飛んでしまったかのようだ。
「分かったよ。じゃあ、よろしく」
すかさず、そう言うと聖樹は部室を後にした。残された葵と瑞樹はその後ろ姿を見送っていた。
「これで良かったんですか？何だか心落ち着かないんですけど……オレ、嫌われてるのでは…」
ロッカーに荷物を入れながら落ち込んだかのように肩を落としながら葵は問いかける。
「いつもの事だよ。気にしないでくれないかい？ああやって、つっかかってくるだけまだ良い方だから……大体、板ばさみになるのだけはごめんだって、あれ程言っているのにな……」
「え？何ですって？」
最後の方が聞き取れなくて、問い返した。
「ううん。何でも無いよ……」
兄弟だからなのか？あの遠い目をする所はそっくりだ。と、ふと葵はその時思った。
放課後の部活は日が短くなって来た今日も続く。葵が入部して早一ヶ月が経とうとしていた。

#3　体育祭（前編）

十月の頭、後一週遇間もすれば、体育祭が始まる。何だか慌ただしい気がする。

体育祭では、クラスごとにブロックを組んだ三年までの対抗試合と合わせて、部活対抗のリレーが有る。この部対抗試合は来年の運動部の予算分けの対象にもなっていたため、どの部も本気に取り組んでいた。

その事を見越して、この陸上部からも、既に八人が選出されていた。

リレーとは１００、２００、４００メーターを三、三、二の割合いで走る競技である。

聖樹はもちろん１００メーターを、そして何とか滑り込みで、葵が２００を走る事になった。

それから、アンカーは部長と決まっているために、４００は忍と始めから決まっているのである。

その上、総体の時期も重なるため、この時期、部活は忙しくなる。

「気を緩めるなよ！」

それが部内の合い言葉となっていた。

部活は、マネージャーと部長の意見を取り入れたきつい基礎練習メニューと、各種目別の練習が用意されていた。

葵は、ハイジャンプをそのまま専攻させてもらい、他の人達より低い背をカバーするだけの跳躍力を発揮して、忍の次に配録を持つだけの選手になっていた。

「結構やるもんだな。さすがあれだけの事は言って退けるだけのことあるよ。あいつ」

部内でも葵の実力は評価されていた。

葵は持ち前の負けず嫌いと、穏やかな人当たりですぐに部に溶け込んだ。

瑞樹は、そんな葵に練習メニューのアドバイスをしてくれるし、忍は直接的な指導を。聖樹は、部活を一緒に行く仲間。少しぎこちなくも有るが葵に接してくれた。
そして何時しか、葵、瑞樹、聖樹、忍は行動を共にするようになっていたのである。

「瑞樹さん！ブロック対抗。一緒のブロックですね！」
部活が終わって一息着いている時、葵は思わず語りかけていた。
「だよな！お互い頑張ろうぜ！……と言いたい所だけど、オレ、運動できないからな」
「あ……」
そう言えば、心臓が悪いとか聞いた気がするのを思い出した。
「すみません」
「謝る事無いよ。その分、仮装の方ははりきってるから！見てくれよな！」
いつでも笑ってるこの人が、何だか不思議に感じられる。
「仮装って何をするんですか？確か三年生だけの演目ですよね？」
この学校は変わった趣向をするなと驚かされる。
「西遊記！オレ、三蔵法師の役やるんだぜ！シナリオも担当して書いてるから楽しみにしておいてくれよな！」
「シナリオまで手掛けてるんですか？凄いなあ……」
「忍のクラスは、封神演技だってよ。太公望やるんだっけかな？確か、聖樹が同じブロックだったような気もするけど……」
ちらりと横を見る。
「瑞樹！あまりどのクラスがどの演目をやるかなんて言いふらすなよな？当日の楽しみがなくなるだろうが！」
忍がギロリと睨み付けて来た。
「おお、怖〜い！」
そこでドッと笑いが起こった。
「一年は、相変わらず騎馬戦だよな。あれ心臓に悪いよ、見てて！

やってる方は命がけなんだろうけど」
瑞樹は、やったことが無いから、客観的な意見でそう言い放った。
「疲れるだけだよな。特に下にいるやつは……」
忍は思い出したくも無い記憶を持っているのかゲンナリしている。
「忍の騎馬、潰れたんだよな？確か！」
大口開けて笑っている瑞樹は楽しそうだ。
「ボクも見たよ、上に乗ってた人がフラフラバランス悪そうだなって思ってたら、突然だったよね」
滅多に語らない聖樹さえ、この話題について行っている。
独リ取り残されてしまった気がした葵は、何だか寂しい気がした。
そんな時、
「そうだな～葵は、今年初めてだから、オレの分も体育祭の醍醐味を味わってくれたら嬉しいよ。きっと、東京にいた頃の体育祭とはまた違った感じがつかめると思うから……」
瑞樹が葵の気持ちを察してか、そっと言い添える。何だかあったかい気持ちになる。
でも、何故東京にいた事を知っているんだろうか？一度も会った事が無いのに。疑闘に思ったが、誰かに聞いたのかも知れないとそう解釈した。
空には既に、冴え冴えとした月と星が瞬いていた。
「さて、そろそろ寮に帰るか。門限になる頃だし」
ひとしきり、会話も弾んだ事だしと一同は、部置前のアスファルトの階段から立ち上がり夜道を歩き出した。

そして、体育祭当日がやって来る。
地方からこの日の為に集まって来た、親御さんや、小中学生。はたまた、近くの高校生の連中がこの二子高校に集結して盛り上がった。
A組からE組までのブロックで争われる全ての競技は、一年の騎馬戦に集中していた。

ブロックごとに色分けされているはちまきが翻る中、応援旗がトラックの外でも風になびいている。
第一団の騎馬は、A組が勝利を収めた。
葵と、聖樹は第二団と、第三団に別れていた。
砂埃が舞い上がる中、今、第二団の騎馬隊はB組とD組との一騎討ち。葵は、騎馬の先頭に立って近づいて来るD組の騎馬を蹴散らしながら猛然と指揮していた。
上に乗っている、小柄な清水が上手く頭の上の紙風船をカバーしながらヒョイヒョイと敵を交わし、且つ敵の頭に有る紙風船を叩き潰している。
敵があと一騎となったところで、終了の笛が鳴った。残りの数からして、D組の圧勝であった。辺りから歓声が沸き立つ。
葵は気分が良かった。こんなに晴れ晴れした体青祭の競技を味わうなんて、初めてではなかろうか？そんな気がして来る。
騎馬を崩し、所定の位置に着こうとした時、何故かDブロックの応擬団の中に瑞樹の姿を発見した。すると大きく手を振っている盗が目に入った。その姿に、ガッツポーズをして見せてみる。
しかし、どう言う訳か瑞樹は大袈裟に吹き出していた。どうして吹き出したのか解らなかったが、背後から清水が、
「ズボン、ずり落ちてるぞ！」
忠告を受けて、直ぐさまズボンを引き上げた。
そんな事をしている間に、葵が気付いた時には、ピストルの音を合図に、第三団の騎馬隊が既に砂埃をあげていた。
C組の聖樹の乗った騎馬隊を捜そうと、葵は目を見張っていた。本当なら自分のブロックを応援しないといけないはずなのに、気持ちは裏腹であったのだ。
小柄で、華奢なナリをしているが、聖樹の負けず嫌いな所が目に見えて明らかである。
だけど葵の目に映る、奮闘している聖樹の姿は何だか可愛く思えてしまう。

しかし、E組の騎馬が後ろから近づいて来て聖樹の紙風船をひったくろうとしたのが災いしたのか、聖樹の身体が、大きくグラリと揺れた。
「あっ！」
声を発する問も無く、聖樹の身体は落馬したのである。直接地面に放り出された形になった聖樹は立ち上がる事無く、地面に突っ伏していた。葵はすかさず、駆け出した。
まだ他の騎馬が争っている中、中央の聖樹の側に駆けつけて行った時、それよりも先に、忍がその堀に駆け込んで来ていたのを目にした。
蒼白な顔をした忍は、聖樹の身体を抱えると、救護隊のテントに運ぼうと辺りを見回す。
「部長！あっちです！」
葵は駆け寄りながら、忍に救急処置のテントの場所を指し示した。
「サンキュー」
それだけ言い残すと、一目散に駆け出した。その後を、C組の騎馬隊の一部と、葵はついて行った。
救護隊のテントは、西側の木立の影に用意されていた。そのテントの簡易ベッドに聖樹は横になっていた。
「あの。聖樹の具合は？」
医務の先生の渋い表情から察するに、そう良い具合とは言い切れなかった。
「脳震盪を起こしていますね。一度、近くの病院に運ばないとなんとも……」
辺りの生徒からざわめきが起こった。心配しているのが手にとって解る。
「担任の先生を呼んで来てもらえますか？私が出て行ったら、この後の事が心配ですので……」
「はい！」
C組の生徒の一人が直ぐさま行動に出た。が、

「オレが、付き添います！」
突然、忍が真剣な顔で医務の先生に言い放った。
「しかし、君は、この後の競技が有るでしょう？ダメですよ。ここは担任の先生に任せておきなさい」
忍は苦い顔をして黙りこくった。
「忍！ここは、先生に任せて！他の仲間に迷惑かける訳には行かないだろ」
何時の間にやって来たのか、生徒の間を潜って瑞樹が、背後から現れた。
「……」
黙って何かを考えている忍。
「あと、我が儘一つ聞いてくれたら嬉しいんだけど……部対抗のリレー、聖樹の代わりに、オレ出るから！」
耳を疑ったのは葵だけでは無かった。忍そして、周りの生徒が一斉に瑞樹を見た。
「瑞樹！お前何言っているんだ！そんな無茶させる訳に行かないだろう」
俄然とむきになっている忍に対し、瑞樹はこれ以上ない笑顔で、
「大丈夫！これ一度きりだって！最後くらい華持たせろよな！」
「瑞樹……」
忍は、一度視線を地面に移したが、フッと吹っ切れたかのように、
「分かった。ただし、負ける事は許さないからな。絶対勝てよ」
どよめきが起こった。葵にはこのどよめきが、何を意味するのかこの時には解らなかったが、後でハッキリと解るのであった。

＃4　体育祭（後編）

速やかに、聖樹を乗せた救急車は、担任の先生を乗せてこの二子高校の正門を後にした。
見送った生徒はその場を離れて駆け足で競技に戻る。
すぐに、午後の部へと競技は開始したからである。
「と言う訳で、聖樹のパートは、瑞樹が入る事になった」
忍の説明で、部員は感嘆の声をあげた。
「瑞樹！バトンの練習して無いけど、平気か？」
「さて……どうかな？一発勝負なんだしなんとも言えないけど……確か、葵にバトンを渡すんだったよね？」
葵相手にまるでバトンを持っているかのような仕種をして、渡す風を見せる。
「身体が覚えてたら何とかなるっしょ」
全く脳天気な人だとばかりに、葵は笑いを堪えた。
「ちゃんと、今日は薬飲んでるんだろうな？」
「はいはい、飲んでますよ。五月蝿く言う人にはかないませんからね～」
いい加減聞き飽きたとばかりにそっぽを向いてしまう瑞樹。
「時間も無い事だし、そろそろトラックに向かわないとな」
八人は、一斉に移動を開始する。
部活対抗のリレーはこの日、最高の盛り上がりを見せていた。何処からか噂を耳にした生徒達は、トラックで始まる競技が何時始まるのかを期待して目が釘付けになっていた。
１８の体青会系の部を三等分にしてその内、上位ニチームを決勝にあてがう物であった。
只でさえ、陸上部は走る事に秀でている部として、体力の有る部と当てられていた。
そしてサッカー、水泳、ラグビー、バスケ、柔道のチームが当面

の敵であった。
「遠藤！スタートよろしくな！」
「任せて下さいよ！」
位置に着いた六人は今か今かと鉄砲の音を待った。
「位置に着いて、ヨーイ……」
鳴り響くピストルの音と共に六人は一斉にスタートした。
遠藤は、一位をキープしつつ次の佐々木にバトンを繋ぐ、そして、すんなりつなぎ終わった後、瑞樹にバトンは手渡された。
一位と言う事もあったためか、瑞樹はまるで流しているかのようなペースで二位のバスケ部に少しつつ距離を離しながら走っていた。
「すげえ……あのバスケ部のやつ、確か１１秒フラットのタイム持ってるんだぜ」
隣のサッカー部のやつがそうこぼした。
綺麗なフォームでこちらにやって来る瑞樹の表情は真剣と言うより楽しそうであった。
「へい！パス」
リードしながら渡されたそのバトンは綺麗に葵に繋がった。葵はそのまま独走で、次の今井にバトンを繋げる。そして、アンカーの忍まで独走体勢のまま陸上部はゴールインした。
予選は見事クリアーした。二位に入ったバスケ部も三位のサッカー部を何とか振り切って予選通過をもぎ取っていた。
次の決勝に備え、体力を戻そうと休む部員達。
程なく全ての予週は終わりを告げ、残った陸上、バスケ、野球、ハンド、自転車、バレー部の者達は再び対戦を余儀無くされていたのである。
スターターの位置に用意する者達は真剣だった。この全てが来年に繋がると、そう考えるとよけいカみが出るのか、スタートを切った遠藤は、佐々木に上手くバトンを渡せず、一位から、一気に五位まで転落してしまったのである。
しかし、その後の反撃は凄まじかった。三十メーターの差を一気

に三位まで漕ぎつけたのだ。
　そしてバトンが手渡された後の瑞樹の走リはまさに、伝脱の風のランナーに相応しい走りで……見る者全てを魅了したのである。
　この場で、バトンを待っている葵には次から次に抜き去って来る瑞樹の姿を直視した。まるっきり無駄のない走りで、気持ち良く風を切って走る。この姿の何処に心臓に爆弾を抱えていると言うのであろうか？
　しかも、たった１００メーターしか無いと言うのに、こんなにごぼう抜きに人を抜けるものであろうか？まるでここだけ、時間の流れが違うような気がする。
　そして、一気に一位まで独走して来た瑞樹はおまけとして二位との差をニメートルもつけてくれたのである。
「葵！任せた！」
　笑顔の瑞樹に答えるかのように、ここはなんとしても、後ニメーターは差を付けなければならない。そう思うと、プレッシャーを感じてしまう。しかし、そんな事を言っている暇は無い。一気に駆け抜けるのみ！
　いつもより、軽く感じられる身体は熱を持って前へ前へと気持ちが移る。
　走っていてこんなに気持ちのいいものだなんて、気付かなかった。あの瑞樹の笑顔が、今の自分を作ってくれている気がして…前向きな態度に出られる気がしていた。
　葵の勢いは止まらなかった。そのまま、二位との差を三メーターにして、今井へと繋ぐ。
　その先は、ダントツのトップでアンカーの忍まで続いた。
　結局、一位独占の陵上部に、来年の部費の割り当ての多くを得る事となったのである。
「凄いですよ！瑞樹さん。オレ、感動しちゃいました！」
　葵は頭一つ低い瑞樹に飛びついて、喜びを露にした。しかも、何故か解らないけど、涙が滲んで来る。

「まったく。変な奴だぁねえ……」
ポンポンと頭を叩いて来る瑞樹。
「もう、走らないんですよね。これが最後なんですよね……」
凄く勿体無い気がした。
「うん。風になれるのはこれで最後……」
「え？」
「さてと、三蔵法師、三蔵法師！」
まるではぐらかされたかのような瑞樹の言葉で、葵は言いたい事をまとめ切れずにいた。

一風になりたい一

葵の中で忘れられない思い出の子は…あの時、確かにそう言った？胸の中で、繰り返し鼓動が高鳴っている。あの時の子は、聖樹では無かったのか？

まさか…

疑問が渦を巻いていた。
「瑞樹さん！」
そして、意を決したように振り返り突如叫ぶ葵。
「何？」
いつもと変わらぬ微笑みを携えて、瑞樹は振り返った。
「雲は、何故あんな風に形を変えながら流れていくんだろうね？」
あの時と一寸も変わらないセリフ。
「何故って、それは上空に風が吹いているからだよ」
瑞樹は極上の微笑みで葵にそう言った。
あの時のセリフと違わずにそう言った自分を思い出した。見付けた！あの子はここに居たんだ！葵は心の底から嬉しさを隠し切れずにいたのである。

その後、仮装。ブロック対抗リレーなどが速やかに行われたあと。結果報告が行われた。
結果は、Dブロックの優勝が決まった。
ちなみに、二位はC組、三位はA組である。
優勝旗は、Dブロックのブロック長が取り上げ優勝ブロックを大いに賑わせた。
葵の心は、ブロック優勝と、瑞樹の事で一杯だった。この日は最高の日になった。
しかし、祭りの後の静けさは何だか寂しい。
各部活は、今日は一時中段。体育祭の後片付けで大忙しであった。
作ったものを壊すのは何だか気が引ける。あの、瑞樹の三蔵法師姿は板についていて、夏目雅子も真っ青の美しい三蔵であった。
あの衣装はどうするのであろうか？そんな事をふと考えてしまいつつも、片付けの手は忘れない。
自分でシナリオを書いたって言ってたけど。そっちの方に進むつもりなのであろうか？葵は気になっていた。
「葵！この片づけ終わったらオレ、忍と一緒に聖樹の所に行くんだけど、お前も行くか？」
廊下の角を横切って行く瑞樹が、葵の姿を見付けて問いかけて来た。
「あ。行きます！どうしましょうか？何時片づけ終わるか分からないから……」
応援旗を背中にかるいながら、大声で叫ぶ葵。
「終わった方が、先に部室の方に行ってれば良いか！？」
「そうですね。分かりました！それじゃまた後で！」

葵は約束をし、再び片づけを続けた。
全ての片づけを終えた学生達は、疲れた身体を寮で休めようと、帰宅した。
葵は、そんな中、部室へと急いだ。

既に、瑞樹か忍が部室に来ているのであろうか？部の明かりが付いていたのである。
ドアを密かに開け、瑞樹達を驚かせようと忍び足で中に入った。すると奥のロッカールームから話し声が聞こえて来た。
「瑞樹。身体の方は大丈夫なのか？オレ、何時倒れるか心配で、ヒヤヒヤしてたんだぜ……只でさえ、聖樹がこんな事になるし……」
何だか深刻な話をしているようだった。
「いい加減、その心配性直さないと、お前禿げるぜ？……いつまでもあの時の事を気にしてるんだったら、大きなお世話だっての。それに、そんな態度取ってたら聖樹に勘違いされるしな」
いつもより声のトーンが低い瑞樹の声が呟く。
「只でさえ、お前の気持ちを組んでるオレに矢が向けられてるんだ。しっかりしてくれよ。そんなんじゃ……オレ…」
フッと言葉が途切れた。
「済まない…直にオレからちゃんとけじめつけるから……」
何の事だ？
葵は、頭を捻った。聞いてはいけない事を聞いてしまったのでは無いか？うすうす三人の間には何か有るとは思っていた。それに、瑞樹と、愚が公認のカップルだと言う噂は絶えない。しかし、現に二人の会話を聞いていると、全くの三角関係のように感じられる。
出て行くタイミングを掴みきれなくて、どうしようかと悩んでみた。そこで、再びドアを開ける所からやり置そうと向きを変えた時、近くの部品に足を掛けてしまった。
しまった！
「あれ？葵？」
奥から瑞樹の声が聞こえて来た。バツが悪いが仕方ない。観念した気持ちで奥へと足を伸ばした。
「遅かったな。さあ、行こうか」
忍は、気にしている様子は無かった。瑞樹に到っても、別段いつもと様子は変わらない。

そんな二人を見て、安堵した葵は二人の後に着いて聖樹がいる病院へと向かったのである。
行きのバスの中、普段と変わらない会話をしてみるものの、安堵はしたもののあの時の二人の会話が気になって、時々意職が外に吹き飛ぶ。
その度に、気にかけて来る瑞樹に、疲れが出てるから…なんて言い訳をしながら、葵は何とか聖樹のいる病院まで辿り着く事が出来た。

#5　未来の風が吹く

ベッドに横になっている聖樹の表情は至って元気そうであった。
「ボク記憶が曖昧なんだよね……後遺症なんだって言われたよ」
「脳震盪起こしたんだから、良くあることらしい。その内ちゃんと思い出せる」
忍は、よそよそし気にしているが、あの時一番に駆け出して行った時の表情は、もうここには無かった。
「聖樹？喉乾かないか？飲み物買ってくるけど、何が良い？後のお二人さんも、オレが奢るからリクエストどうぞ」
話に華が咲き始めた頃に、瑞樹が言った。
「じゃあ、オレも一緒に行ってやるよ」
「いえ、ここは後輩のオレが！」
なんて言っている聞に、結局じゃんけんで決める事になった。その勝負は、瑞樹と、忍の二人に決まった。
残される葵は、聖樹と二人で、病室で。
何を話そう？聖樹と話すのは苦手意職が有る、そんな事を考えてると、珍しく聖樹から話し掛けて来た。
「どう思う？忍と瑞樹……」
ギョッとした。聖樹のさっきまでの表情が崩れている。黒目がちな目が潤んでいた。
「どうって？」
何の事か分からないとでも言うかのように問い返した。
「ボクの入る余地無いかなって事……」
こんな時、どう答えれば良いか、葵には分からなかった。ただし、一つだけ分かる事が有る。
「聖樹が倒れた時、部長。いの一番に駆け付けてたぜ…病院にも行くってそりゃあ後が見えて無いって感じでさ……」
聖樹の目が大きく見開かれた。その上、透き通るような白い肌が

みるみる真っ赤に染まったのである。
「ほ、本当？」
素直なまでに、こんなに分かりやすく反応されると、正直、葵が照れくさくなった。
「マジマジ！」
少し考えるようにして、聖樹は、
「まだ少しは、望みは有るのかな……」
うっすら微笑みを浮かべる聖樹に、嘘はついて無いよな。と自分に言い聞かせる。しかし、こんな風に煽って良いものであろうか？後で、聖樹が辛い目に合う事は無いであろうか？
その事がチラチラ頭を掠める。
「ねえ、葵。僕に力を貸してくれないかな？ちょっとだけ探りを入れてみたいんだ。どうしても知りたいし、そろそろ区切りをつけたいから……」
と、葵の耳元にロを持って行って、何やら咳く聖樹。
「え？」
「良いよね？」
「う一ん。でも何だか……」
「決まり、決まり！誰にも言わないでね！」
聖樹の企みは、やりたい事は良く分かった。しかし、この方法は、何だか気が引ける。
葵は、踏躇してはいたが、聖樹に流されるまま承諾した。
そんな時、ジュースを買いに行った二人は帰って来た。
「ほい、聖樹はこれ！で、葵はこれだね」
と、瑞樹は手に持っているジュースの缶を二人に手渡す。
「あのね。二人に聞いてもらいたい事が有るんだ」
聖樹は、ウーロン茶の蓋を開けながら、瑞樹と忍に話しはじめる。
葵は、ハラハラしながら瑞樹と忍を眺めていた。
「ボクと葵、付き合う事にしたんだ。だからこれからは、邪魔しないでね？」

聖樹は、普段しない微笑みで二人に言い放った。
忍は、何を言われたのか分からないとでも言うかの様子で、聖樹を食い入るように眺めた後、呆然としていた。瑞樹は、サッと、忍に視線を移し、その後冷めた目で、聖樹を見た。
「ねっ？葵！」
突然話を振られて、
「そう言う事なんです」
としか言い様が無かった。
「ふーん。分かったよ。聖樹……邪魔はしないから安心して良いぜ。さて帰るか。こんな時間だし」
手元の時計を見て瑞樹は立ち上がった。しかし、茫然自失の忍は、そんな瑞樹の行動について行く事が出来ない。
「じゃ、また明日。ゆっくり休めよ」
瑞樹は、ドアの所から聖樹にそう告げると、静かに部屋を出て行った。
「あの、部長……帰りましょう」
葵は、何だか気の毒になった。肩を軽く叩く、
「葵、また明日ね」
聖樹は、この勝負のついた結果を楽しんでいるようである。
その後、忍と葵は暫くして速やかにこの部屋を後にした。
可愛い顔をした小悪魔は、葵の心を惨じめにさせていた。

寮に帰った葵は、明口からの学校の課題に身が入らず、今日の事を振り返っていた。
忍が好きなのが、聖樹であることはこれではっきりしてしまったのだ。
じゃあ、瑞樹はどうなる？一番辛いのは瑞樹ではないか？
客観視している葵は、じゃあ、自分自身はどうなのだと振り返った。
居心地が良い、四人と言うバランスの中で、突如、二人が出来て

しまった。
残されたのは、二人で……しかし、その一人は、見事失恋。こんな時、自分は残された者にどう言葉をかければ良いのか？
ドキドキしているこの胸の内は、一体なんだろう？男同士でこんな事を悩まなければならないなんて、絶対変だ！と言う感情と、なぜだか、こうなってくれた事に、高鳴る鼓動を押さえ切れない感情が入り乱れて、よけいに苛立ち始めていた。
夜風が、肌を突き刺し始めた夜に、もう戸を閉めないといけないと気付き、窓辺に手を掛けた。すると、　コツン。と窓を鳴らす音が聞こえた。
窓の外を見る。ここは二階。気のせいかと再び窓に手を掛けた時、小石が窓を叩いた。
「葵！」
声の主に無付き、葵は一階を見渡した。カーティガンをはおった瑞樹が、そこにいたのである。
「どうしたんですか？」
周りに響かないように声を殺して、葵は話し掛ける。
「やっぱ、ここで合ってたんだ」
と、近くの木によじ登りはじめる。
「危ないですよ！」
言ってはみたものの聞き入れてくれる様子は無かった。仕方なく、二階の葵の部屋の窓辺まで上り詰めた瑞樹を招き入れる事になったのである。
「どうしたんですか？こんなことするなんて…」
ベッドに腰を掛けた瑞樹に、温かいインスタントコーヒーを勧める。
「うん…あ、結構綺麗に片付けてるんだ？」
と、部屋の中を見渡しながら、瑞樹は話を逸らせる。
大体の想像はつく。こんな事までしてやって来たと言う事は、真相が知りたいからであろう。

「あれは、聖樹とつるんだ事ですよ」
葵は、聖樹に黙ってるように言われたけど、敢えて話した。
「気付いてるよ。試したんだろ？あの聖樹の考え付きそうな事だからね」
マグカップのコーヒーを啜りながらホッと息をつく瑞樹。
「あいつ我が儘だから…葵に迷惑かけたね」
勉強机の椅子を後ろに向けて座り込みながら聞いていた葵は、
「迷惑と言うか……困ってしまったと言うか…聖樹に頼まれると何だか断れないと言うか……」
フッと瑞樹は笑った。
「葵の場合、誰でも断れないだろう？」
「そうかも知れませんね……」
葵は苦笑いをした。今迄こういう人格だったかな？
「忍は、聖樹のことを小学校の頃から好きだったんだ。でも、見かけに寄らず、忍は照れ屋でね、どうしても、好きだって言えずにいたんだ」
あの様子だと、そうかも知れないと葵は思った。
「ロッカーも隣だと不味いからって、わざわざオレの隣にしてしまうくらいにね。莫迦じゃないかって思うんだけど、そんな忍は奴らしくって、好きだったな……」
フッと遠い目をする。
「……オレ、瑞樹さんと部長が付き合ってるって聞いてたんですよ……噂もあったし……それに、ここで初めて会った始業式の日、その……キスマークつけてたから……」
言って良いものか躊躇いながらも、問いかけた。
「キスマーク？……ああ、鬱血してたんだよ確か……猫とじゃれあってたから」
そんな事まで良く見てるんだなとばかりに、小首を捻っている。
「忍とは何もないよ。ただ、付き合ってる事にしてたのは、オレに悪い虫がつかないようにってね。でも大きなお世話だっての……昔

から、そうだったんだ。何につけても、オレに付きまとって」
「やっぱり、身体を気に掛けてたんじゃないですか？部長、そう言う感じの人みたいだし……始めて会った時は恐い人かとも思ったんですけど……」
あの時は正直ビビった。
「あの時は薬飲んでなかったのがバレてね。追い掛けられてたんだ……走るのはオレの方が断然速いから……逃げるの得意だし、待ちぶせされてね」
思い出して笑いを堪えている。
「小学生の四年の時、忍が転入して来て、足の速いオレを陸上部に引き込んだんだ。で、大会に出てみたら、記録出してしまって……でも、その日にぶっ倒れた。しかも心臓に疾患がある事が発覚。突如、東京の病院に入れられたよ」
それで、東京に来ていたんだ。葵は、あの時の事を思い出していた。
「それからだよ。忍がやたらと、オレにかまい始めたの……鬱陶しいったらありゃしなかったぜ……」
そんな話をしていた時、訊いてみたい事が葵にはあった。
「どうして、あの時はあんなに綺麗な黒髪だったのに、髪の毛の色抜いちゃったんですか？」
瑞樹は、ふと視線を泳がせて、
「聖樹とオレ、双子みたいに似てたから……見分けつけるためにかな……もう忘れちゃったよ……」
続けて、
「それにこの方が、オレらしいだろ？」
ニチャッと笑う瑞樹。
「オレ、始めは聖樹があの時の子かと思ってたんです。すみません……」
目を見開いて、端樹は葵を見た。
「謝まんなよ。オレ名前言ってなかったしな……間違えられても仕

方ないだろう。オレは葵の名前聞いてたから、すぐに分かったけどな。正直驚いたよ。こんな所で会うなんてな」
また一ロコーヒーをすする瑞樹。
「覚えてたんですか？同姓同名かも知れないのに……」
「ああ。病院抜け出して、初めて声を掛けてくれた奴だったし。それに、あんな変な質問に律儀に答えてくれる奴なんて、滅多にいなかったから……あん時の言葉そのままに覚えてるよ」
風が有るのか、悪がガタガタと小刻みに音を残した。
ヤバイ泣きそう……
葵の顔は見る見る赤く染まっていった。
「おいおい。何で泣くんだよ…」
「分からないけど。勝手に涙が……」
ベッドの脇の木箱にマグカップを置くと瑞樹は葵の側に近寄る。
「来るなよ！何するかわかんないから！」
「何をしても構わないよ…オレの代わりに泣いてくれるやつがいるんだもの」
葵は息が止まりそうになった。
自分が発した言葉の駅も、瑞樹が言っている言葉も理解できなかった。
一つだけはっきりした事は、葵は瑞樹を好きになってしまっていると言う事だ。
「オレ、聖樹が、葵と付き合うからって聞いた時、正直、腹が立った。忍がこんな風に鎌を掛けられる事に腹が立ったのは正直一つあったよ……だけどなにより、葵に頼んだってのが許せなかった」
「え？」
それって……
思考が入り乱れる。
「オレ…葵の事が好きなんだ」
葵の心臓ははち切れんばかりに、ドクドク血液を体中に流している。

「え？……オレ…その…」
次から次に、情けない事に涙が溢れて来るのを止められない。こんなに、自分が涙もろいとは思ってなかった。
「本気で言ってるんですか？部長の事好きなんでしょう？仕方なくオレの事好きだなんて言ってるんじゃないですか？」
自分で何を言っているのか分からない。
まるで女の子のように感情を露にしてる自分が嘘のようだ。
「嘘じゃない！本気だ！きっとあの時、既に捕われていたのかも知れない……オレ、葵に側にいて欲しいし、聖樹のことになんて従って欲しくない！オレ、オレ……」
瑞樹は床にへたり込むように膝をついた、葵は溢れ出す涙をゴシゴシと服で拭うと、瑞樹の肩をそっと抱き、
「もう良いよ。瑞樹さんに涙なんて似合わない……オレが泣かせたみたいじゃん」
軽く頬に唇を寄せる。
笑っている瑞樹が好きなのだと改めて思った。
「キスして良い？」
目蓋を閉じる瑞樹に、了解を得た葵は軽く唇を重ねる。瑞樹の唇は涙の味がした。

「それじゃあ、忍にはオレから伝えとくよ。聖樹にはちょうど良いよ。少しは人の気を知れってんだ！」
再び、木の上から下に下りて行こうと窓から身体を乗り出す瑞樹は、極上の笑みを讃えて葵の頬にキスを落とす。
「でもそれじゃあ、オレが喋った事になるのでは……」
何だか気が引けるのは、聖樹の怒った顔を想像するからである。
「良いの、良いの！オレは、聖樹の魔の手から葵が離れてくれなきゃ気分が悪いんだから！」
つまりは何だ。一番損な役を演じているのはこのオレなのか？
幸せな気分から突然冬風を手にした気分だ。

「それじゃまた明日！部活で会おうな！」
元気に木を降りて行く瑞樹は、一階に降りてからも、手を振り続けていた。
そんな中、聖樹に会うのが恐くなって来た葵であった。

「喋ったでしょ……」
二日後、妬ましい目で葵を見る聖樹の目は、意外とそこまでは恐くなかった。
「でも良いよ……忍、ちゃんと訳話してくれたから…」
フッと微笑んだ聖樹の顔には、全てを洗い流した後が見られる。
「そうなんだ。良かったね」
葵はバーを元に戻しながら答える。
「葵も、良かったんじゃない？」
「え？」
「瑞樹と良い事あったでしょ？」
何もかもお見通しと言うような目で葵を見る。
「……何の事だか……」
はぐらかそうとしたけれど、聖樹には全て分かっているようであった。
「気付いてないのは、本人だけか？葵の目、見れば分かるんだけどな…」
訳が分からない葵は、唖然と聖樹を見る。
「目？」
「目と言うか、視線かな？」
「……視線？」
「葵、いつも瑞樹を追ってる事に気付いてないんだから不思議だよね。多分、部の連中はみんな気付いてるよ。今日は視線を向けてないから、あれ？とか思っちゃった」
葵の顔は火が吹き出しそうな勢いで真っ赤になった。
「無意識って、恐いよねえ」

下から眺めて来る聖樹の目から逃れようと視線を流した。すると、
「そこ！さぼってないで、さっさと練習に入れ！」
突然の声に掘リ返る。
瑞樹が腕組してこちらを見ていた。
「知ってた？瑞樹、葵が部に入部してから一度も遅刻してない事！」
そう言い残すと、聖樹は駆け足でトラックへと走り出した。
なんてこった。
葵は、空を仰いだ。
秋空は、綺麗な鰯雪を漂わせて流れている。後一刻もすると、綺麗な夕焼けを拝む事ができるだろう。
もうすぐしたら総体も絡わり、このグラウンドから瑞樹の盗を見る事も適わなくなる。そう考えると何だか寂しい気もするけど、今は精一杯の事をやろう。
心地よい風が優しく葵の身体を包み込む。
あの大空目掛けて舞い上がれ！
そう心に願うと葵の身体は、綺麗な弧を描いてバーを越え宙を舞った。

#5　未来の風が吹く（後書き）

作品としてはもう七年前くらいのものです。
古いんですが、自分がＢＬらしきもの書いてたのって珍しいなという事で、載せてみたと言う所でした。
小説というよりシナリオのような・・・
結局、この後葵や瑞樹、忍、聖樹たちがどうなったのか？書いて無いんですが・・・幸せになってることを祈ろう。という所ですね。
続き、今書いたらきっと大人な恋愛しか書けそうに無いな～うむむ。
ｍａｃで書いてた小説なので、少し化けてる文字あるかもしれません。気付いた所は直したんですが・・・
という事で、雰囲気だけ楽しんでいただければ幸いです。そういうＢＬ小説なんで・・・では、また違う作品で。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1404g/

空と風とあなたと・・・

2010年10月8日13時33分発行